安政六年巳二月四日

大船を御国恥辱の丸懸おき
公儀より中帆を拵向後御国
中通おゆるし嫌先年相違ゆえ向後御国
恥辱を自地日の丸旗を
布おゆるし
公儀御軍船を中通細船と中帆相違
揚り申諸家おゆるし大船出来次第家と
形
公儀御船奉行不行届御船と五十文相

二月

一 来月から三日間休業致候旨布告ニ付 五字

亜米利加商船入津ニ付中上ル書付

中村石見守

四月

此ごろ米国別紙亜船入津いたし候ニ付支那向号
外書し其筋為ニ知申亜米利加商船ニ付十一日ニ和
上海出帆浦賀へいたり義ニ付ては川表ニ住居之筋ニ不致
者人数組ニ付立ては神奈川表ニ住居之筋ニ不致
出来ニ付上海ヘ相ゆき同じく安政ハルリスと申
ものと十八日 彼国 土曜日 迄ニて長崎表ニ滞留ニ付出
帆迄いたり候ニ付 当表ニ通ず 安政
通ニ付清国ニ成ニ付一日中ニ ハルリス 亜船ニ

右船主ヘ申付候書面趣意之通向々ニ而出立帰帆申付候

右之文封候処今般御奉行所ヨリ上海港碇泊中英国
コンシユルセ子ラールヲルユツクより申越之主従拾八人ニ而彼
国英吉利軍艦ニ乗組当人大人数一同江戸表ニ住居
ニ上ル同人ヘ対シヂフロマチーキアゲントニ而場合未タ難相済故
出帆ニ付様同様出船之英吉利ニ而も右ニ付当年江戸
表ヘ来着之儀ニ付有之候ニ付右様之次第ニ御座候

御国人数之儀も右因候申付事ニ相違申候儀ニ御座候

申上候以上

五月廿一日

其二

安政六年未四月三日御届

一 昨朔日和蘭船一艘本川沖ゟ入津いたし
候事ニ付其内御用船碇泊中ニ相成候
向々ゟ可申達候事

四月三日

其三

去ル朔日本川沖ゟ入津致候和蘭船一艘同六日
出帆致候ニ付右之段向々ゟ可申達候事

四月十六日

安政六未年三月十四日出達

新潟奉行ヘ

新潟表ヘアメリカ官吏お越し申候ハヽ水夫共
こゝに長崎ヘ行まで同道致し等組下ヘお越り写
蒸水夫科送り方ハ一通ハ会津ヘ
おもむき申候ハヽ新潟奉行ヘ
表ヘ出張ハ水戸藩ヘ
行方ヘ
小出信濃ヘ
ヘ付ハ
ヘ
ヘ

十三日発足致し申事

外国奉行ヘ

右同文

右之通新潟奉行ヘ渡り写ハ
ヘ

一 ハ
外国ヘ
外国奉行ヘ

備前石附町西表芝赤根
場所地
弐千八百六拾坪余

右外國人旅宿之儀、仮令り名濱表之儀被
見合之上四日後速為其外國帰帆之儀取扱
以用石相書相渡候ハ、兩國ニ而市場ニ向ハ
ハ遠
同ハ
右之通り御心

久貝因幡守
池田甲斐守

安政六年巳未六月伊豆國
神奈川港開港ニ付外國人共同所ニ居留且六ヶ川
筋之限り其他隣郡十里之間安行ハ外國帰帆之節
四ヶ日間奉行支配向之者高橋帰帆之節ハ
節外國人ニ付而不都合之儀出来ハ早速同所
行ハ市出張詰ヶ相工城ハ古十里間所分知行者
之分ハ勿論決来旅人ハ玉造ハ相ハ不
帰之儀ハ之ハ不ハ
右之ハ神奈川奉行ハ向ハ下ハ

船ハ

六月

同年六月　江戸表へ申達西

四日達之

魯西亜佛蘭西英吉利阿蘭陀亜墨利加ヨリ條
約書ヲ取結ハレタル書写ハ家中末ニ
迄申聞セ置ル様ニ達ス

六月

安政六未年七月ヨリ四月太田備後守殿存寄上書
和国交易定約之儀ニ付親定之儀迄ハ自使而已
中立ヲ不許合之儀等閑行自然　御政道ニ
障不容易時節ニ付上夷国ヲ恐ル様ニ
仰出方ニ付ハ　合方ヲ
ハ　各方ヲ猶予影響和実之事ニ付
厳志不安ヲ抱ク事ヲ以且国之和
之国ニ対シ如此ニ陥ル所謂　御政道ニ
中居ル者不少ニ付我ニ対シ
不幸代者第一有ル所ニ
安ニ不幸徳和ヲ人中立ハ

御寛容被為遊候故多年来此上應接不相立候
節ニ至り手切ニ相成打拂之　仰出ニ相成候ハヽ速ニ御家門
其諸大名ニ至迄家人其外農工商百姓町人ニ至迄同
地深乱不致候而武備不衰　御德輝御政道ニ相立
御国威も難相成　仰出ニ可有之其上和夷之御前
至急ニ候ハヽ　仰出ニ可然候

一　水戸中納言殿ニ而者　御寛容之御所置ニ而者
是迄之節者只府国中人気難相治　御取締之通ニ而者
遠からす萬一人気不穏之通年和夷人船其外一般
之人氣ニ拘り安窮之思召も相違別ニ付大変之
時節柄御取止之儀肝要ニ存候和夷之儀者追而否
ニ而取計通　御沙汰不相立候ニ付　御安堵ニ相
り不申上拙者義ニ而役目相勤居候志入候処申上候

以上

七月七日

太田備後守